大正十二年七月廿七日第三種郵便物認可
大正十四年九月三十日印刷納本

スキーと山

大正十四年十月一日發行（一年月一回）

第三十五號

札幌 山とスキーの會 發行

◇本誌は創刊號より秩父宮殿下の御愛讀を得てをります◇

第五十三號目次

抜萃

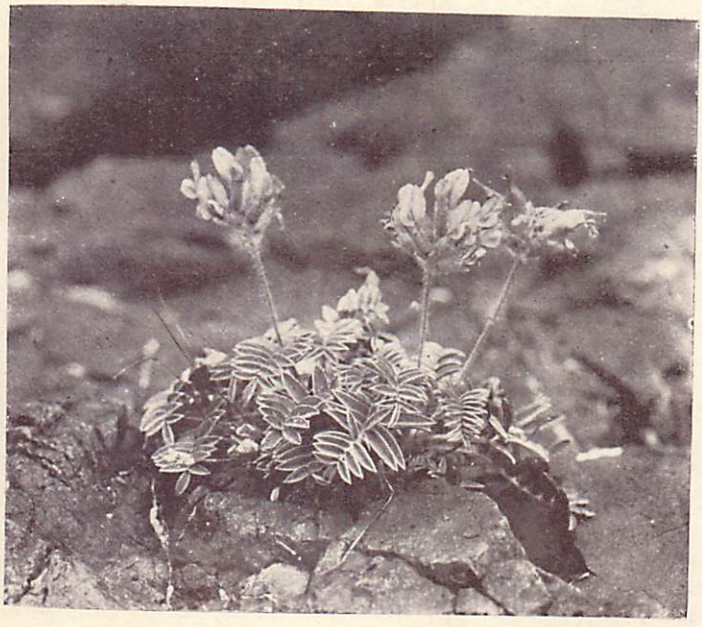
研究

高い高度に於ける馴化　阿部謹吾譯　〔二〕
再びスキースポーツとスキー登山に就いて　岡村源太郎　〔八〕
美生川より日高山脈へ　和辻廣樹　〔一三〕
三考　君一生　〔二六〕
スキー競技種目に就て　岡村源太郎　〔二七〕
りしりしのぶ　館脇操　〔三五〕
スキーの思ひ出（瑞西、サント、モーリツツへの話）　大野精七　〔三七〕

寫眞版

レブンソウ　岡田喜一
美生岳より南方を望む　和辻廣樹

大正十四年十月發行



ウンレン

岡田喜一

——抜　章——

——只獨り丘の頂上に帽子もかぶらずに立つて居ると、風が顔に當つて、自分の心はあらゆる定まつた思想から、解放されて自由になり、自分がいつでも生きて居たいと願つて居たやうに、生きて居るのを感じた。山を下つて市に歸り始めた時、悲しさが再び自分の心をさらへた。夕暮の光は、夕方の中に暗がつて行き、注意しない鐘の響につれて、自分を取り圍んで居る寂寞と歩調を合せて居た。自由と休息の世界と、自分との間の何等かの連がりを殘して置かうと思つて、自分はいつでも、その一片を家へ持ち歸つた。——それは地面の葉の中にあつた黒い皺のよつた、燥いた橄欖であり、そけ落ちて、先のとんがつた、大理石のやうな筋の入つた一個の石であり、粗野な、お椀のついたどんぐりであり、固い青々した松葉ぼつくりであり、樫のとんがつた葉つぱであり、樫の下で拾つた沒食子であつた。——

パピーニ「自叙傳」

高い高度に於ける馴化

阿部謹吾譯

一八七五年に Tissandier は彼の仲間二人と巴里から輕氣球に乘つて有名なる上昇を行つた。彼等は酸素を用意したが用ふることが出來なかつた。二六五〇〇呎で Tissandier は氣絕し意識を取戻した時には輕氣球は下降しつゝあり、彼の仲間は死んで居た。輕氣球は二七九五〇呎に達したのだ。これは馴化のない急速な上昇であつた。この實驗の結果輕氣球に靜にして坐つて居ても二六〇〇〇呎と二八〇〇〇呎との間で死ぬことがわかつた。然るに輕氣球では死の起る二八〇〇〇呎の高度にエベレスト登攀者は酸素の供給なくして達し尙筋勞が可能であつた。この兩者の差異の原因は全く馴化によるものであると思はれる。勿論輕氣球の上昇コンディションと長日月を費す登攀のコンディションとは比較されないが、併し我々は一氣に急速に登つた場合と漸進的に登つた場合とを比較して高度が增すにつれて、それにアダプトして行くファクターが如何に有力なものであるかと云ふことを知る事が出來る。次に述ぶる所は T.Howard Somervell により "The Assault of Mount Everest" に報告せられた「高い高度に於ける馴化」についての記載である。

一九二二年のエベレスト登攀は科學的研究が主目的でなく頂上を極める事が主目的であつた。併し私は生理學上の研究に、數年この方關係していたので自づと高度が人體に及ぼす影響について觀察することに熱心であつた。此の觀察は寧ろ主觀的のもので何等正確な論據を有して居ない。即讀者は直に數理的に示す何等の表も轉載されないことが了解出來るだ

らうバンクロフトと其の他の仲間はアンデス探險に向つて居たので、私は彼等バンクロフトの結果が高い高度に於ての馴化の正確なプロセスについて、我々が簡單な裝置でなし得るよりも更に正確な知識を與へてくれるだらうと充分信じて居た。我々は數理的に示す表を作ることを此のアンデス探險隊に任し、專ら實際方面のみを觀察した。即馴化の速度と影響を觀察し、馴化の起る原因は探究しなかつた。

高度の最初の影響は、我々がチベット平原で出遇つた程度に殆んど全部のものが單に息切れがしたのみであつた。そのために步行速度が限定され、登りになると通常なら不愉快なチベット鞍が重寶がられた。一行中數名のものは時々激しい頭痛に襲はれた。さして高くない一七〇〇〇呎の高度で、私は立つたり坐つたりしてる時でなく寢て居る夜に Cheyne-Stokes 呼吸（淺い呼吸と深い呼吸とが交互に除々に行はれる呼吸）をして居た。そして私は Cheyne-Stokes 呼吸をコントロール出來なかつた事を明確に記憶して居る。我々のパーティーの數名のものは輕い嘔吐をしたが、併しそれは永續的の影響ではなかつた。チベット高原に二、三週間も居る內に唯息切れのみは癒らなかつたが、他の惡い影響はなくなつてしまつた。勿論息切れは比較的低い高度でも或る程度にあつた。この位の高さに於て前述以外の影響は、一行中の比較的老年な數名が一六〇〇〇呎のベースキャンプに於て、非常に食慾を減じたことである。併し此の影響は日數を經過しても癒らなかつた。

山で激しい仕事を始めた時に我々は馴化について面白い體驗をする事が出來た。そして又非常に高い高度に於ける仕事の速度（前から知られて居た）と耐久力の二つを證する事が出來た。各學派の科學者は此の探險の出發前に馴化は二〇〇〇〇呎以上の高度に於ては不可能であるだらうと豫言した。何故彼等がかゝる豫言をしたか自分は何時も不思議に思つてるのであるが、多分彼等は過去に於ける多くの登攀が海拔二三〇〇〇呎の附近で失敗に終つてる事實に瞞着されたのだらうと思ふ。併し我々はそれ以上の高度に於ても馴化の可能なることを決定的に證明する事が出來た。實際私はエベレスト山の高度以下の高度に於ては、如何なる高度に於ても馴化の理論的限界を見出さない。我々の體驗は非常に主觀的であつたが、主觀的なるために恐らく讀者より一層鑑識されるだらう。且又主觀的なるが故に數理的に表はす代りに感じを以て

し又個人的體驗をそのまゝ報告した事を許してくれるだらう。

マロリーと私は第三キャンプに達し、踏査隊によつて選ばれた位置に其れを作つた時に、我々の爲す可き最初の仕事はノースコルにもう一つのキャンプを作る準備をすることであつた。私は最初の登りが雪と氷の呪はれた様な斜面であり、ステップ毎の苦痛、一歩毎の苦闘、最後に根限り疲勞した事を忘れる事が出來ない。第三キャンプに一日、二日過してから再びコール迄登つた。此の時はストラット、モルヘッド、それから確かノルトンも一緒だつた。コール迄の登りは困難であつたが第一回目のやうなことはなかつた。コールに達してもモルヘッドと私は非常に元氣よく、エベレストの登攀路を探つた程だつた。數日にして再びノースコルに迄登つたが、その時は實際息切れより來る不快しか感じなかつた。我々のコンディションの此の變化を說明する科學的論據はないが、併し二一〇〇〇呎の高度に於ける數日間の生活に依つて、我々は異常な程度に高度に馴化したのである。前には困難だつた仕事も今は比較的樂になつた。我々の體質の此の急激な變化によつて科學者の豫言の誤れることを知つた。加之酸素の人工的供給なくして二七〇〇〇呎迄登る事が出來る體力を得たのである。尙馴化は可能であるのみならず、かゝる高度では非常に速かである事を決定することが出來た。

かくして二〇〇〇〇呎以上の高度に於ける一週間の滯在と運動とにより、エベレスト登攀に對して必要な肉體的準備を得たこの點に就いて、數名の人の體驗は面白いと思ふ。我々は登攀して居た時呼吸が自動的なレートになつた事を知つた。マロリーは呼吸が遲く深くなつたと云ふてるのに、自分は淺く早くなつた樣に思つた。併し如何な高度に於ても殆ど正確に同一割合で登攀した。ノースコルの下では私は一歩について呼吸三であつたが、二六〇〇〇呎では五であつた。併し充分に緩くり歩行したので何等苦痛を感じなかつた。僅かの距離を急いでも、二、三秒間休息せねばならなかつた。即休息は避く可からざるものであり、且又休息なしに歩行する事は不可能の樣に思はれた。併し同一歩調が續けられたので誰も止つたり、或は景色を嘆賞して仲間を愚圖々々させる事を望まなかつた。二六〇〇〇呎の高度では私は脈搏一八〇、呼吸五〇—五五(一分間)であつた。併し體のコンディションが異常なるに拘はらず一行は平氣であつた樣に感じた。勿論、この脈搏に耐へ得るには心臟が若くなくてはならない。が併し若過ぎてはいけない。若過ぎたならば心臟は容易に肥大し、

永久に破損されてしまうに違ひない。

私の體驗ではエベレストの頂上を極むるに、二一〇〇〇呎の高度の滯在によつて得られた馴化で不充分であるならば—私は不充分である等とは思はないが—二三〇〇〇呎の高度の馴化で充分である樣に思はれる。我々の行つたその他の重要な實際の體驗は餘り感心されないものであつた。期待に反したものであつた。即我々總てが馴化の割合が違つて居つた。且又我々パーテーの數名のものは(特に老年のもの)高い高度に滯在してる間、體のコンディションが實際損せられて居たらしかつた。併し假令馴化される高度が極められる迄は、酸素の供給なしにエベレストの頂上を極め得る人を選擇することは困難ではあるが、酸素の供給なしにエベレストの頂上を極めることが可能なることを立證した樣に考へる。私一個人としては二七〇〇〇呎で全く何等の異常を體に感ずる事なく健全であつたやうに考へられた。且私のコンディションは二五〇〇〇呎或はそれ以下の高度に於けると何等異ならなかつた樣に思はれた。選擇すれば二一〇〇〇呎の高度で二、三週間生活して得た體驗の馴化によるのみで、他に何等助なしにエベレストの頂上を極める事が出來る人が必ず澤山居る事を疑はない。かゝる人々の一隊が第三キャンプ位の高度で二週間或はそれ以上生活する事が許され、且二三〇〇〇呎或は二四〇〇〇呎迄二—三回登攀する事が許されるならば、私は此の肉體的馴化の點から天氣よく風もそう激しくなかつたなら、エベレスト山の頂を極め得る事を疑はない。馴化が起るだけの餘裕が與へられなかつたならば、恐らく誰も—即造化の戲でもない限り—頂上に達する事が出來ないだらう。人工的酸素供給を用ふるならば馴化する必要はない。酸素供給裝置を持つた馴化しない人による所の登攀の危險はその裝置の故障が重大な結果を齎す事である。之に反し馴化した人は讀者諸君や私がモンブラン位の高度に明日にも立つ事が出來るに同樣に、何等の助なくとも二九〇〇〇呎の高度に立つことが出來る。一九二二年の探險隊の出發の時は私は酸素の人工的供給なしには、二五〇〇〇呎—二六〇〇〇呎の高度に登攀出來ないと云ふ意見を有してたが、この事實の出來る事を立證してからは頂上を極めるチャンスは酸素を用ひない方がよりプロバビリテーあるやうに思ふ。何となれば酸素裝置を用ふることになると、その裝置や豫備の圓筒の運搬に澤山のクーリーが要る。之に反し酸素なしで登攀する場合には、キャンプの準備並に高い高度に在るキャンプ中の食物の運搬に、二、

三人のクーリーを要するのみである。それ故にエベレスト山の頂上を極めるための最良のチャンスは高い高度に於ける、キャンプに耐へる事が出來る。全く馴化した九―十人の登攀者を送り出し、登攀の組を三組或は其以上作り、天氣の狀態が許す限り繼續して登攀を行ふにあると考へられる。この方法で登攀を行へば頂上を極める可能性を增す事が出來るのみならず、頂上を極める可能性が他の如何なる方法よりも多い樣に思ふ。酸素や多數のクーリーを用ひて出來た、一或は二の大袈裟に組織されたパーテーの努力に總てを賭して失敗に終るよりは、少數のよく馴化したパーティーに登攀を數多く行はせた方がよい。二五〇〇〇―二七〇〇〇呎の高さ迄達する事が出來るクーリーの割合は、ほんの僅かである故、何れの登攀に於ても彼等クーリーを出來得るだけ大切に用ひねばならない。登攀中我々は如何にして登攀すべきかを常に念頭に置いた。併しその考は大抵間違つて居た。以上は筆者の考へである。正しくあるまいが價値あることだけは斷言出來る。

最高度の副影響の中に一般に食慾、性質及精神のコンディションに及ぼすものがある。我々の大部分は二二〇〇〇呎とそれ以上の高度との間に於て非常に怒り易くなつた。何ごなれば高度が幾分精神的平衡を破り、それで、性質が怒り易くなつた形で最初に表面にあらはれた爲である。尙幾分決斷が鈍くなる。私は二七〇〇〇呎の高度に近づきつゝあつた時、エベレストの頂上に達す事が出來るか如何かと云ふ事等少しも念頭になかつた事を明瞭に記憶してる。ブルースとフィンチとが寫眞機を持つて登攀しながら彼等の最後の日の登攀の寫眞を寫す事を忘れたと云ふ事實は、心の狀態が高度に依つて變化された好例である。

私は老年の數名の者の食慾に及ぼす高度の有害なる影響を述べたが、幾分は我々總ての人々にその影響のあることは眞實であつた。私は第三キャンプの最初の數日は食物が美味くなかつた事、ノースコルに登る途中で辛じて、やつと乾梅を飲み込んだ事を記憶してる。併し我々の大部分は食物の味の無い事（特に肉や消化し難い食物に對して）は、假令我々の食慾は低高度のキャンプに達す迄ノーマルでなかつたが、高い高度に滯在してる內に減じて來た。酸素供給裝置を持つた人々はノースコル以上の高度に於て盛んなる食慾のあつたことを報告してる。それで食慾の減退は空氣の稀薄なるためなることは疑ひもない。恐らく酸素の少い空氣を呼吸してる間は、假令如何して胃液の分泌の減少を來すかを了解する事は

困難であるとしても、その減少することを假定することは出來る。

馴化は假令一九二二年バンクロフトが證した如く、血球の數を增加する事に全く無關係であるとも雖も、尙この血球增加を來すは馴化の起る大切なファクターとして認める事が出來る。併し血液濃度の增加は其のビシコシテーの非常に增加することに關係あるに違ひない。そして此の血液濃度の增加が總ての小血管を壓縮する事と相待つて、烈寒と結合するときに於て其處に凍傷に必要な總ての條件が現はれて來るのである。此の故に此の有利な馴化は恐らく凍傷の危險を增加するものである。故に馴化されたものは特別に手足被服物に注意せねばならぬ。非常な高度に於ては被服を多くする事は困難で少く被服する事は樂であるから。

尙述べねばならぬ問題はエベレスト登攀のアフター、エフエクト(餘響)に關する事であるが、これは多種多樣にして科學的報告は得られない。我々の仲間のあるものは、一晝夜或る者は五—六日間疲勞してた。又或る者は心臟肥大せると云ひ、或る者はノーマルであつたと報告されてる。又或るものは體の一般狀態は良好であつたが、凍傷のために無能になつた。それ故アフターエフエクトに就いて總括的に述べる事は出來ないが、醫者として私は(この探險に加つた自分自身と自分の仲間を觀察し)他日登攀し又登攀後最小の回復期を望むならば登攀中に己の力以內に健全に自己を保つ事が缺く可らざる事である事を痛感した。一般に無茶に登らうとし又自分の力を其の極限迄費し盡さうと云ふ傾向がある。併しながら力のほんの最後の數オンスは體力に非常に努力を喚起し、又最大の需用を作るものである。若しも體力が極限迄用ひられるならば體力は一定期間休息して始めて繼續して保存され得るのである。登攀の運動は非常に大切だと云ふのは私の意見だロングスタフがエベレストに二度登攀する事を許したのは唯マロリーと私だけであつた。多分我々はエベレストに登る途中でやつた探險ミノースコルに設けられたキャンプに最初に這入つた仕事によつて、此の方面に適する事が認められたのであつた。併し各人の體の特質を知つたのみで、此の樣な點から一般的の事を推理する事は難かしい事だ。山の麓に着いた時そのコンディションが能ふ限り良好である事を知るには、個人個人につきその體質の特長を知り調べて見なければわからない。

再びスキースポーツとスキー登山に就いて

岡村源太郎

本誌前號に於て赤松君がスキー登山とスキー競技との關係に就いて論ぜられたが、私も大体に於て之に賛意を表するものである。恐らく他の多くのスキー家も同樣な意見を有せられて居る事と思はれるが、私は又一個のスキー競技者の立場から此の問題を考へて見たい。然し餘りくだ〳〵しくなる懼れがあるから、極めて簡單にスキー登山とスキースポーツとの關係を此處に述べるに止める。猶私はスポーツを極めて廣義に解釋しスキースポーツの中にスキー登山やスキー競技があるやうに考へて述べる。即ち赤松君のスキースポーツは私のスキーゲームである。

スキースポーツと歷史

スキーの歷史として擧げられてある事項は最初からスキースポーツとしては認むべきものがない。發現地たる北歐スカンヂナビアでは軍事や狩獵等の實用スキーを以て起り次第に盛大を極めたのである。戰爭にスキー隊が利用せられたり大きなスキー旅行が行はれ、その間又狩獵其他の場合の雪上徒渉具として欠くべからざるものであつたのである。

之が十八世紀には歐洲中部アルペンに擴がつて行き、その實用性は益々高まると共にスキーは次第にスポーツ化して行く傾向が顯著になつて來た。即ち技術の進歩と共に長距離競走とジャムプが行はれるにつれて、此の二つがスキー競技會に於て毎年盛大に競技せらるゝに至り、又一方ス

キーに依る高山連岳の跋渉によりスキー登山が既にスポーツ化して來た。之で平地及び丘を舞臺とする畑スキー即ちスキーゲームと山岳登攀に應用せらるゝスキー登山とは明かに別の道を取り進むようになつた。

スキースポーツとスキー競技

以上の如きスキーの發達によりスキーによる長距離競走やジヤムブ、登山等に著しくその盛大さを見らるゝに至つたのであるが、此處にその性質上同じ歩調を取れぬものがスキースポーツ中に現れた。即ちスキーによる長距離レースとジヤムブとがスキー競技（ゲーム）として盛んに發達し得たけれども、之に反しスキーを使用する登山は決してゲームとなる事は出來なかつた。

田中薫氏によればゲームはスポーツの發達した結果出來たものだ云ふが、實際スキーの歴史を見れば、スキースポーツに於ても然うである事が直ちに察せられる。スキーテクニックの進歩發達がスキースポーツ中にスキーゲームを作り上げるようになつたのである。然るに登山はゲームに於ける如き對人的因子は極めて少く自然即ち雪の山岳を相手とするだけに、その性質がゲームとして成立するものとは甚だ趣が異つて居る。即ち登山の一分科となつたスキー登山も亦ゲームとなる事は勿論無かつたと同時にスキーゲームとは可成に緣の遠いスポーツとなつた。

スキー登山とスキーゲーム

之に依つてスキー登山とスキーゲームは本質的にその性質をも異にして居ると考へ得らるゝので、その相違は既に赤松君が述べた通りである。從つて嚴格に云へばスキー登山者とスキー競技者も甚だ懸隔ある道を進むようになつて居る。殊にスキー登山はスキーを有効に使用するがスキー登山であると云ふ定義が認められるゝ以上は、スキー登山者の行動は全てがスキーに依つて居るのではない。アルピニストとしてスキー以外のシュタイグアイゼン、ザイル、ピッケルのテクニッグが甚だ重きを爲して、少くともスキーは登山の爲の Ein mittel 一手段たるに過ぎんとして居る。スキースポーツ本來の道よりは大部離れつゝある事は火を見るより明かである。之に反してスキー競技者は Alles mittel が唯スキーのみである。スキー無しでは瞬時もスキーゲームは續けられない。スキーゲームのルールにはスキーデボットの存在を許さない。

若しスキー登山の定義を變へて（それは甚だ不合理な事であるが）スキーを全て使用するがスキー登山であるとしても、ザイルピツケルテクニックを知らざる者は眞のスキー登山者ではない。從つて如何なる場合にもスキー登山者はスキーのみが唯一のものではない。識るべき事はスキーそのもの以外にシユタイグアイゼン、ザイル、ピツケル、氷、岩、其他山岳の各種狀態等が並べられてあるのである。之等とも甚だ密切なる關係にあつて登高に志すがスキー登山家少くとも現代のスキー登山家の信條であらう。

之に反しスキーゲームに向ふ者の頭は嚴格な意味に於ては雪ミスキーのみで充滿して居る。之と共に競技に際してのスピード、飛躍距離、スタイル等が大いに考慮せらるゝのである。從つて日常の生活にもスキー登山家とスキー競技者の間には、僅かなりとも本質的相違が見出さるゝ筈である。

狹義のスキー娯樂（スポーツ）

上述の如くスキースポーツにはスキーゲームなる畑スキーと登山に應用せらるゝ山スキーとがあるわけであるが、未だ此のゲームにも登山にも全く屬して居ないスキーを樂しみつゝあるスキー家が甚だ多い。それはスキー術の入門を練習しつゝある人や、少し熟練して手近の雪山にスキーを樂しむだり、娯樂的にジヤムブの練習を爲たりして居る人々であつて、スキー家の大部分は此の狹義のスキースポーツに親しんで居るのである。

或は此の所謂娯樂スキーがスキー競技やスキー登山の基礎となるものであつて、狹義のスキースポーツに親しんでより後、初めて專門化した色彩の明かになつたゲームスキーや山岳スキーに研究の歩を進めて行くわけである。即ち千米内外の氷や岩よりフライな雪山に登つたり十米内外のジヤムブに興じて居る間は、その人のスキーは未だ一般スキースポーツの域を脫して居ない。スキー競技練習の爲に一定のトレーニングを開始したり、山岳に關する智識やスキー以外の登攀技術をも習得して初めて、スキー競技者或はスキー登山家となるのである。

かゝるスキーの分科はスキー術研究者の方面にも異れる色彩を示すようになつて居る。今著名なスキー家を數名擧げて其の人々の傾向を考へて見るに、アーノルド、ランは山岳スキーに、シユナイダーは競技スキーに、ビ、カウルフイールドは一般スキーにその研究對照が向いて居る事を

その著作等によつて想像する事が出來る。之に似た事は我國の如き狹いスキー界でも指摘し得る。

スキー團体に就いて

今スキー家にも山岳スキーやゲームスキーの色彩が判然として居る事を述べたが、之は又スキー團体或は一地方のスキー界にも異れる傾向が示されて居る。大きくしては一國のスキー界に就いて考へても然うである事が判る。然し我國のスキー團はその傾向の相違の大きい事は他國には一寸見られないやうである。即ち或スキー團では全員は擧つて一般スキー及び競技スキーに趣味を持つて居る所があるかと思ふと、他には登山の爲のスキーのみを相手として全然競技には眼を向けないスキー團がある。或は又その所屬のスキー家は大きな登山もせず競技にも目立つた競技會には出場する事なく、ほんの娯樂スキーのみに親しんで居るやうな團体もある。之等はスキー團或はスキー部の名は均しく同樣であつて、同じくスキースポーツを樂しみ居るにしても、その所屬の部員の氣持或は行動には甚だしい色彩の相違を認めないわけにはいかないのである。即ち此處にもスキーゲームとスキー登山の區別が現はれて居る。

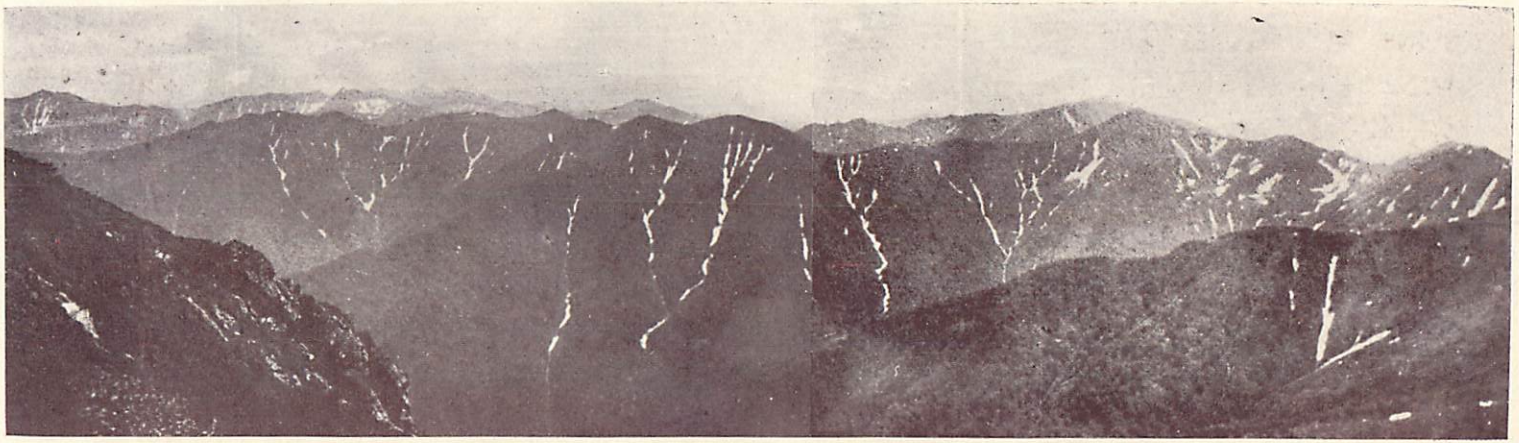
然し學校スキー團ではスキー部と稱せられて居る所では大抵スキーゲームとスキー登山（嚴格な意味ではないのもあるが）の兩者の道を取つて居る。そして又スキー登山とは云ふものゝ一般スキースポーツの部類に屬するのが少くない。之に反して山岳部或はスキー山岳部と稱して居るスキー團では殆ど登山の爲のスキーのみに力を致して居る。競技スキーは全く顧みる事なく僅かに一般スキー術に對しての消息が洩れ聞かれ得るのみである。從つて中には寧ろ山岳部なる名は純粹の山岳部の意味となつて、殆ごスキー團たるの性質を有しない部もある。然し之は登山の爲のスキーと云へばその山岳部はスキーを一手段として居る團体に過ぎないのであるから何も奇異な點は無い筈である。

然しながら最後に一言しなければならぬのは、たとへ前述の如きスキー團が全てをスキーによるスポーツにのみ力を致して居る所謂純粹のスキー部であるにせよ、文言上スキーを一手段とするに過ぎぬと云ふて居るスキー山岳部にせよ、その所屬の人々がスキーに依つて得て居るものは非常な廣さと深さを有して居る。又唯單にスキーを一部分使用したと稱するスキー登山を顧みても、その時の登山家は

スキー家として立派なスキー術を揮つて、雪山に於けるスキーの効果を思ひ切り深く味つて居る筈である。或は娯樂的に山岳滑走者（グレンデロイフェル）を以て任じて居る人や、スキー競技者も、その人々の背景には雄渾な山岳美や廣大な雪原美が控へて居る。定義上之等スキースポーツをゲームとか登山に區分しては居るものゝ、そのスキー家の心底にはスキーと山岳とは互に振り切り得ない一脈の何物かの存在を認定して居る事を忘れられない。その明らかな證據として登山家にしてスキー登山の練習を爲しつゝある間に、スキーそのものに非常な興味を感じて純粹のスキー家になつてしまつたり或は之と反對にスキー練習者が登山によつてスキーを樂しみつゝある間に全く山岳の魅力に引き入れられて行く人等が決して少くないのである。雪山に登つて居てもスキー練習場に遊んで居ても或はゲームスキーに身を入れて居ても常にそれ等のスキー家の心は山岳とスキーに固く結び付けられて居る。そして全てのスキー家がかゝる氣持でスキーを樂まれ山に登られん事を望んで止まない。

以上大略赤松君の說に贊し、猶小さな私の考へ及び希望を極くかいつまんで述べた積りである。之によつてスキースポーツの分科に進み入つて居る我々の心持が、幾分なりとも了解せらるれば大變うれしい。

（九・一七）



美生岳より南方を望む

和　辻　廣　樹

美生川より日高山脈へ

和辻廣樹

一行　伊藤秀五郎　小森五作　永井政治　和辻廣樹
人夫　水本文太郎、中山淺吉

十一日　午後十時札幌發

十二日　曇

午前六時に芽室に着く。昨夜の汽車は隨分な人で私達は誰も座れず、汽車の通路にリュックを置いてそれに腰掛けて居た樣な始末なので今朝の眠い事夥しい。

私達がこの計畫を實行するに付いて人夫の事や、何やかやで色々便宜をはかつて下だすつた芽室村長のO氏と人夫の中山（アィヌ）との出迎へを受ける。そしてO氏に役場に案内して貰つて一先づ落ち着く。なかなか立派な役場である。

朝のうちに芽室を立つ豫定であつたのだが他の人夫の都合やなんかで芽室を六人揃つて出發出來たのはかれこれ二時近くである。空模樣は今にも泣き出しそうだつた。道は單調な一本道である。三時に中美生（ビセイ）に着き、五時廿分上美生に着く。今日は驛遞に泊る。何分昨夜から持ち越しの眠むさがあるので、夕食をすますなり、眞黑な空を氣にしながらもすぐ心地よい眠りに落ちてしまふ。

十三日　晴天

昨日と打つて變つてまるでいゝ天氣だ。皆喜んで早くから起きてしまふ。七時に上美生を立つ。眞夏の太陽の白光が燒き付ける樣にじりじり照り付ける。ゆうべ寒くて驛遞

の爐の火に抱き付いたのも夢の様だ。ボタボタと垂れる汗にすぐ濡れてしまふ。可なり大きな路を歩るきながら美生川に沿ふて進む。時々思ひ出した様に聞えて來る水音が心地よい涼しさを誘ふ。

十時トムラウシ川と美生川との分岐點に出る。この邊からはそろそろ山の氣分がして來る。なつかしい樹の匂ひがプンと鼻をつく。十一時卅分本流とメムロ岳より來る支流との分れ目に出る。此處で晝食を攝る。木影で冷やりとして實に氣持がいゝ。食後、川の中の大きな石の上に腹ばいになつて、ウトウトしながら木の間をもれて來る陽の光りに汗ばんだ体を干す。

十二時過ぎてから又歩き出す。ものゝ十分も歩かないうちに細い路はなくなつて居る。北海道の夏の山特有の徒渉だ。幸い美生川の水量は多くなかつた。

木の葉から滑り落ちて來る柔かい晝の陽の光を浴びながら冷い、奇麗なこの山の水に足を浸して歩るく時の心持は徒渉する者のみが味ひ得る。時々腰の邊まで浸らせられる途中一休みした時に、水の淀みに見事なあめ鱒が悠々と泳いで居る。あまり美事なので夕餉の料理にとNとKとが持參の釣絲を垂れて早速釣にかゝる。Kが大きな奴を難なく釣りあげる。今日の所は一匹で辛棒して、又歩るき出す。

次第に川幅が狹くなつて來る。それと同時に日の光りも弱くなつて來る。しかし歩るきながらどちらを向いても、天幕を張れそうな所は無い。アイヌのNとMが心細そうな顔をする。腹も減つて來た。今日釣つた鱒を食ふ事を考へながら歩るく。

六時に二俣に着いた。二俣から少し上手に丁度天幕を張れそうな所を見付け出して早速張つてしまふ。もう空には星がキラキラやつて居る。やがてなつかしい焚火がどつと暗闇に燃へ上る。めしの泡を吹くのが待ち遠しい。

幾らあめ鱒が大きくても六人の男にかゝつてはたまらない。たちまち餓へた男達の腹中に葬り去られてしまふ。食後のテーは滿腹の悲哀を慰めてくれる。暖い、赤い焚火の色に照らされた友の顔は一層懷しいものである。私達の合せて唱ふヨードラが水音と共に切り立つた兩岸に物凄く反響する。

十四日　快晴

五時過ぎに起きる。朝めしをすまし、辯當をこしらへ、

天幕をたゝんで歩き出したのは七時半頃である。朝方私達の氣分を少々暗くさせた雲はどこかへ吹き飛んでしまつて、見るだに心の浮き立つ様な青空になつた。九時卅分には二千三百呎の高さであつた。この日の最初の二俣へ着いたのは十時廿分、十二時にはバロメーターは二千九百呎の高さを示して居た。この邊から時々木の枝を透してピパイロ岳らしいのが見える。あまり豫想して居なかつた雪は私等をこの上もなく興奮させる。川の傾斜は益々急になり川幅もせまつていよいよ谷川らしくなつて來る。最上の二俣（三千呎）に着いたのは二時廿分であつた。此處からは眞すぐに雪渓を透してピパイロ岳の頂上が仰がれ得る。隨分な傾斜だ。初めて先づピパイロ岳を眺め得た私達はお互にどれだけ喜び合つた事か。

日沒までには到底上まで攀じ登れそうもなく、急傾斜の爲その途中に露營出來そうな所もなさそうなので、大事を取つて今日は此處で泊る事にする。昨日の露營の遲かつたのに比べて今日は又實に悠々たるものである。天氣は益々よい。幾筋も走つて居る雪渓を眺めては、皆で登りのコースを考へる。アイヌ達は焚火の側がいゝと云つて私達の天幕の中へは入つて來ない。木の枝を敷いてその上にごろりと横になつて居る。明日の事を考へると緊張した心の苛立ちが全身を駈け廻る。嶺から谷へと舞ひ降りてくる冷い山の風がバタバタと焚火に凄赤く照されて暗の中に浮き出て居る天幕を煽る。

十五日　快晴

五時、天幕から這ひ出す。今日も亦實に素晴しい天氣だ毎日晴天續きなので、もつたいない様な氣がする。今日こそは雄大な日高連脈を眺め得られるのだ。ぐつと體を引き緊めて、一歩一歩と登り出したのは丁度六時三十分だつた。

傾斜の比較的緩い間は雪渓の上を登つたがやがて直ぐに急になり出し、これ程の雪を豫想しなかつた私達のわらじではとてもはかどらず、又危險もあるので雪と土との接觸した所、もしくは全然雪でない所を攀る。アイヌのMは實に達者である。話を聞いても北海道の山は隨分あちこち登つて居るらしい。他のアイヌのNとは比較にならない。登り方もなかなか巧みなものである。九時半頃昨日の露營地からピパイロ岳の頂上までの半分位まで登つた。重いリュックに殆ど眞直ぐに下に引つ張られながらひどい傾斜を岩やブッシュの根につかまつて攀じ登るのは、とても樂なも

のじやない。十時前、食を取る。芽室岳を始め北の方の日高山脈のかゝりの山が美しく眺められる。朦朧として霞んで居る樣はまるで春の樣だ。

一手、一足を緊張させて亦登り出す。傾斜は益々加はる突然私の頭の上で大きな音がしたので、オヤツと思つて見上げた瞬間、アイヌのNが二尺四方もある石をかゝへて脊を下に投り出された。併し幸に彼は二間位い下の岩で停つた。石は彼の体が止つた時、彼の額ミ足の皮を少々むいただけで斜にそれて、急傾斜の雪渓を物凄い速さで轉落して行つた。もし彼を止めた岩が無かつたら恐らく彼の命は無かつたかも知れない。又彼の体が停つた時落ちた大きな石を彼の胸か腹に眞ともに受けて居たら、命は失くさないまでも岩と岩とに峡れて大怪我はしたに違い無い。兎に角よかつた。一時は足をやつたのじやないかミ心配した。早速傷の手當をしてやる。繃帶をして貰ひながら彼は『命拾ひをした。命拾ひをした』と失神した樣な聲で呟いて居た。この時以來元々山登りの經驗が殆んど無いと云つていゝ位の彼はすつかり臆病になつてしまつた。元氣が彼の体から鞍替えしてしまつたのだ。山を下り、川を下り、里に出るまで彼はこの小膽を維持し續けた。

雪渓が切れてから可なり長い間猛烈なブッシュをくゞる傾斜面のブッシュくゞりはなか〳〵辛い。ブッシュを出るミ丁度熊の遊び場所の樣な高山苔の柔かく生へた所に出たもう殆んど登り切つたのだ。遲れて登つて來るアイヌのNを待ち合す。後には大きな偃松の生えて居る場所が少しあるのみだ。アイヌのMが先に一寸入つて見て大したブッシュじやないと云ふ。

ガサガサと獰猛な偃松の枝を潜り、飛び越へて七八間も登つたと思つた時パット眼の前が開けて急に明るくなつたあゝ私等の眼前に私等と同じ高さで日高山脈がその豪奢な姿を現したのだ。十二時卅分。六人共しばらくは言葉も無くその雄大な起伏に見惚れてしまふ。やがて口から出た言葉は素晴しいの一言だけだ。然り實に素晴しい。然も雪の多いのには茫然としてしまつた。この北海道の南方の山脈にこれ程まで雪が多いとは思はなかつた。又その雪の殘り方が實に端麗だ。一番近くのトツタベツ岳からその南のポロジリ岳、エサオマントツタベツ岳、ピリカペタン岳（札内岳）前ポロジリ岳、ミ實に美しい起伏を示して居る。私等は數日の苦闘の後に報いられた或るものに對してはたゞ喜びミ感謝の思ひを捧げるばかりだ。異狀の興奮に皆の顏は

輝いて居る。高山蝶と共々舞ひ度い様な氣持ちになる。

ピパイロ岳の三角標（地圖ではトッタベッ三角標）が尾根傳ひに二三百米東の方に立つて居る。西の方の二千米の岩につゞくまでの尾根の梯子は陸軍の地圖では大分間違つて居る。此處で腰を落ち付けて食を攝る。神威岳と覺しい邊は遙か雲烟糢糊たるものではつきりそれとは判らない。並大抵の遠さじやない。めしを食つて居る時アイヌのMが『熊が居る、熊が二匹居る』と云ふ。指さゝれた方を見てもなかなか見えない。じつと目を皿の様にして見つめるとなる程、五百米位ひ尾根傳ひに、傾斜面に蠢めく二つの小さな黒點がある。Mは時々熊を取りに山へ這入るゝ云つて居るがよく早くそんな遠くのを見付るものだとすつかり感心してしまつた。しかも此處から見て、その點程の熊をまだ大人の熊じやないと云ふ。私等は熊は熊でもあまり遠いので感じが出ないなどゝ大きな事を云ふ。いづくんぞ知らん後になつてあまり感じが出過ぎて青くならうゝは神ならぬ身の知る由もなかつたのである。しばらくすると下りていつてしまつたのか見えなくなつてしまつた。

空はいよいよ青く、而も殆ど風が無い。尾根づたひに西に向ふ。アイヌのNはともすれば後れ勝ちになる。偃松には大正九年の陸軍測量當時の刈分の跡がかすかに殘つて居る故幾分歩き安い。二時頃例の熊の居た場所の百二、三十米手前に來る。ゝ誰かが又熊が遊んで居るぜと半分面白い様な半分恐ろしい様な聲でどなる。どれどれと云ふので偃松の所から延び上つて見るゝ遊んで居る、遊んで居る。可愛いのが遊んで居る。そこで皆で傍らの草の上に腰をおろしてパイプをふかしながら熊の相撲を見物させて貰ふ。向ではまだ私達には氣が付かないらしい。盛んに猫がじやれる様に二匹で立ち上つてはごろ〳〵草の上にころんで居る實に可愛い。柔い太陽の輝く大空のもとに大きな雪田や雄大な嶺々を背景に、赤、黄、紫と色様々に咲き亂れた御花畑の上で何の心配もなく面白そうに戯れて居る二匹の熊、確かにそれは一寸人の想像出來ない愉快な景色であらねばならない。私達はものゝ五分間も見て居た。歩き出す前にMがホーイと叫ぶと二匹ともびつくりした様にこちらを向いた。そして私達を見るやいなや二匹ともえらい奴が來たと云わぬばかりに、大した速さでブッシュをくゞり、急傾斜の雪田を横とびに雪片を蹴散らかしながら彼等の立派な道を逃げて行つてしまつた。熊は彼等の行きかふ道を縱横につけて居る。私達も熊の道を歩るかして貰ふ。全く歩る

きいゝ。人の行きかふ道と何の變りもない。到る所に熊が高山植物の根を食ふ爲か、掘り起こして散らかした跡がある歩るいて居て、その邊からヒヨッコリ出て來やしないかと氣持ちの惡るいこと甚しい。千九百米の嶺から南へ向つてトツタベッの方へ尾根を歩るく。三時過ぎ頃、Mが急に大きな奴が居るぞと叫ぶ。又熊かと思つて見てみると六十間ばかり向ふの傾斜面に一匹大きなのが苔の根でも堀つて居るのかゴソゴソやつて居る。金毛の艶々した、福々とよく肥つた逞しそうな熊だ。煤烟の立ちこめた都會の動物園の檻の中で、自分を見に來る人間共にペコペコお辭儀をしては薯のかけらの一つも貰ふ、彼等の祖先の生活をすつかり忘れてしまつた熊などゝは比較にならない。ホーイとどなつた私達の聲を聞いてこちらを見るや猛烈な速さで私達の方へ驅つて來る。さあ私達はまさかと思つて居るものゝ青くなつてしまつた。所がM一人平氣でニヤニヤ熊を見て笑つて居る。とう〳〵熊は私達の前二十間足らずの所まで來て止つた。やれやれと思ふ。又ごそごそ動き出す、はつとする。びくびくものだ。山林の朴訥な親爺の前ではこちらも最も朴訥にしなければならない。高い山で育つた熊は人間なんかを見るのは初めてなのだらう。彼は私達を見に飛んで來たのだ。一分二分彼はクルリと私達の方に尻を向けると一目散に偃松の中に姿をかくしてしまつた。その時のMの愉快そうな笑ひ、それは熊を友達の樣に思つて居る彼れでなくては笑へぬ笑ひだ。私達もやつと安心した。

まだ私達の匂ひが廻らないから熊の方では氣が付かないのだとMは云ふ。兎に角びつくりさせられた。一八八六米の尾根を少し下つた所に雪もあり、偃松の影で風當りの少くなそうな所があつたので今日は此處に天幕を張る事にする。時計は五時廿分を廻つて居た。雲間に沈んで行く夕日が映えて山脈を美しく輝す。今日は初めての尾根どまりだ。食後焚火を圍んでの話は今日會つた熊の事ばかりだ。今日はアイヌ達も天幕の中でねる。空には燦爛として星が美しい。天幕に當る烈しい西風に時々深い眠から我にかへる。明日も又いゝ天氣だらう。

十六日　晴天

尾根どまりはやはり寒い。五時頃に起る。今日も又素的な天氣だ。あまりいゝ天氣がつゞくので少々薄氣味が惡い併し折角嶺に出たのに降りこめられて、てんで眺望の利のない時の事を思へば薄氣味が惡いなどゝ假にも云へたもの

じやない。明方の冷い空氣を胸いつぱいに吸ひ込む。ブル〳〵と總身が震へる。

天幕の外の焚火にあたる。谷々には一面の靄が立ちこめ點々として浮ぶ山巓はまさに絶海の孤島だ。靄の消え初める頃朝の光が五彩もて幾筋もの雲溪の流れを照し出す。黎明の空氣、澄切つた蒼空、モルゲンロートに眠りを覺した高嶺の數々、あゝ何と云ふ壯觀だらう。今更ら限られた人間の言葉の力乏しい事を思ふ。

今日は尾根づたいにトツタベツ岳からボロジリ岳まで行く事にする。アイヌのNを一人天幕に殘し、後五人で食料をはじめ必要品のみを持つて九時頃露營地を出る。

熊の事が氣にかゝる。Mは優松の刈分の跡から熊の道、柔い苔の上を實に上手にコースをこつて行く。一歩毎に美しい花園が展開されて行く。右は日高の國、左は十勝の國だ新冠(ニイカップ)の流れが日に輝いて美しく海につゞいて居る。

空晴れ
空晴れ
陽の光、痛きまで
眼を刺しつゝ。

人は高きを仰ぎ
念ひを專らに
たゞ攀づることのみ想ふ、今。

踏み過ぐる歩み
歩み
從つて咲きこぼるゝ淡紅の花、花。

白き恐怖の
默して微睡む谿谷(たに)は
季節を狼敗せしむる花苑なり。

（登高行より）

十時四十分トツタベツ岳に着く。こゝから見たボロジリは凄く大きい。ボロジリにつゞく尾根の左側の下は雪の溶けて流れる沼が三つばかりある。Mは去年熊を取りに來た時この沼で七匹の熊を見てさすがの彼も氣味が惡かつたと云ふ。ボロジリの頂上のすぐ下で食をとる。頂上十二時五十分。ピパイロ岳がはるか北になつてしまつた。南方に一際高い嶺を私達は神威岳と思つたがMはそうじやないと云

ふ。

一時三十分頂上を下る。來た通りの道を引き返へす。午後からは太陽が笠をかぶつてゐる。明日は雨らしい。しかしこれだけ日高山脈を眺められたからには心殘りはない。少し降らねば里の百姓達が困るだらうと柄にもなく愁傷な心を起す。トツタベツ岳から、尾根に張られた私達の天幕が綠中の白點となつて見える。四時廿分露營地に歸る。今日は幸か不幸か熊には遂に一度も見參せずである。殘つて居たNも熊は出ませんでしたよと云ふ。夕食は皆んなで天幕の中で食べる。實にうまい。次第々々に夕暗が迫つて來る。赤々と燃える焚火の傍で熱いテーをすゝりながら例のヨードラを合唱する。アイヌ達はニヤリニヤリと笑ひながらそれは日本の歌じやないだらうと云ふ。そこでヨードラを說明してやる。スイスだとか何んだとむづかしい文句が出て來てもわかつた樣なわからない樣な罪のない顏をして聞いて居る。山の夜は刻々としてふけて行く。

十七日　曇後に雨となる。

危い空の色合だ、トツタベツ川に下りつくまで願くば降つてくれるなと心に祈る。七時に天幕をたゝむ。去らば雄々しく立てる日高の嶺々よ。この燃ゆるが如き大自然の中に永久に豪快にして若くあれと六人の男は靜かにトツタベツ川につゞく雪溪を指して匂はしい山の肌を下つて行く。此處の雪溪も急傾斜でそして可なり長い。トツタベツ岳の雪溪を下つた方がよかつたかも知れない。雪溪の中頃で早ボツボツ降つて來た。今まであまり好天氣がつゞき過ぎた位だ。もう降られても仕方がないと觀念の臍を固める。見る間に嶺が見えなくなつてしまふ。途中二度ばかりアンザイレンする。雪溪の幅は隨分細い。何度も雪溪が切れて瀧になつて居る。そして瀧の後が亦雪溪となつて續いて居るどうしても雪溪の上は下れない。仕方がないので兩側の山の腹をからんで下りる。雨で濡れそぼつたブッシュの中をくゞるのだからたまらない。川へでも飛び込んだ樣に体中殘す所なく完全にびしよ濡れになつてしまう。雨は寸時も止まない。やつと雪溪を下り切つてしまつたのは十二時四十分だつた。少し歩るくのをやめるとと寒くてガタガタ震へて齒の根が合はない。アイヌのMの見事な顎髯からボタボタと雫が垂つて居る。

一時過トツタベツ川最上の二俣に着く。腹が減つて居るので木影で立つたまゝパンにバタを付けてかじる。震へて

パンがろくろくかめない。水量はもう隨分增して居る。こんな上流、殆んど最上流なのに濁つた水が飛沫を飛ばして流れて居る。徒渉もこう水が濁つては見當が付かない。Mがこの調子ぢやあ先へ進んでも仕方がないから何處かに天幕を張つてしまはないかと云ふ。私達もその考へだつたので下りながらあちこち天幕を張る場所をさがしたが、なか〳〵いゝ場所がない。やつと水ぎはから四尺ばかり上に七八尺のすかんぽが生えては居るが六坪ばかりの平な所を見付け出してこゝに張る事にする。びしよ濡れのリュックをおろし、木片れですかんぽをぽんぽんたゝき倒して大急ぎで天幕を張つてしまふ。此處は天氣の時でもすかんぽが生へて、落葉がたまつて居て、濕め濕めの所らしい。併しこの場合贅澤な事は云つて居られない。すぐどうやら火をつけてどんどん燃して雨の中で火に暖まる。やつと人心地が付いた。二時過ぎだつた。此處へ着いた時は水の上に出て居た岩がもうすつかり水をかぶつて居る。火で腹を暖めて天幕の中には入り込む。天幕の中でも下はびしよびしよだ。木の小枝を切つて火で水を乾して天幕の中へ敷き、どうやら濡れずに座れる樣にする。木から落ちる滴が天幕にあたつて滅入る樣な音を立てる。夕食まで私は毛布のシュラーフザックの中にもぐり込んで寢てしまふ。

雨はほんとに降りつゞけだ。小止みの時に一度消へた焚火に又火をつけてめしを炊く。夕食後は天幕の中で歌つたり話したりしてもじめじめでは陽氣な氣持ちがまるで出て來ない。ラテルネを消して皆寢てしまう。眞暗な外には雨の音と水量の增した流れの音とが底氣味惡く聞へる。Mは大丈夫この分では明日も晴れまいと云ふ。

十八日　雨

バラバラと天幕にかゝる木々の滴の音に目を覺ます。依然として降つて居る。昨晩は、天幕の漏り水がたまつて、たまり水が出來、うつかり體でも延ばそうものならジャブンと腕でも何んでもたまりに突き込んでしまうので體をひん曲げて寢たからか今日は體のあちこちが痛い。皆二時頃までごろごろして居る。二時半頃めしを食う。夕方には止むかも知れないと猛烈に增えた水量さを横目で睨んでさても明かりそうもない空を仰ぐ。何分外は雨だから仕方がない。口を動さない間は横に寢そべつて居る。六時半頃夕食を攝る。ごろごろと何もしないでも皆食ふ事だけは達人である。昨日敷いた木の枝は下から濕つて來て濡れて來たの

で又敷きなほす。下敷きのすかんぼの匂ひが腐つた様な匂ひなのでたまらない。明日は天氣も何んとか變るだらうとうんざりしながら又横になつてしまう。よくこんなに寢られるものだ。Mは明日も雨は續くだらうと云ふ。

十九日　雨

猛烈な雨だ。一同全く悲觀してしまふ。水量の增へた事は最初の日とまるで比較にならない。今日からは、普通にめしをバクバク食つて居た日には食料の方がたまらないので思ひ切り儉約して、又寢てばかり居て腹も減らない筈だから一日一回だけ食べる事にする。而もその食うものたるやめしではなくしておじやなるものだ。小降りを見ておじやをこしらへる。二時頃食つた。私達の仲間は皆廿才を過ぎて幾らも立たない若者だ。いくら運動をしないからと云つて一日一回のおじやじやあ一寸たまらない。仲間で體の一番大きいNなどは物言ふ音色が減つた様にさへ思れた。

ごろごろして居て話に出るものは食ひ物の事ばかりだ。やれ上等のもち菓子が食ひたいの、素的にうまい羊羹が食ひ度いの。蜜豆が食ひ度いのとまるで五つ六つの駄々子と變りがない。パイフエを燻らしながら思ひ切りコンクなテーをガブガブ飲む。雨は寸時も止まない。天幕の内も外もジメジメだ。バロメーターのサックの皮に黴が生へて居る全く驚いてしまふ。體にまで黴が生へそうになつて來る。まる三日も小止みなしに降られたらもう澤山だと皆無情な雨雲をブンブン憤慨する。Mは明日あたりはもうそろそろ晴れるだらうと云ふ。今まで彼の前以つて云つた天氣豫報は皆當つて居る。私達も氣分が少しは明るくなつた。夕方六時頃からすつかり小やみになりひぐらしの聲さへして來た。現金なもので天氣になると決ると元氣に駄辯り出す。夜の九時頃には空は黒かつたが雨は止んで居た。

二十日　曇、後晴れる。

雨が止んで所々久し振りの青空さへ顔をのぞかせて居る今までおとなしかつた連中はガヤガヤと駄辯り出す。黴臭い天幕の中から氣持ちのいゝ朝の空氣の中へ飛び出す。胸が透く樣だ。今日は何れにせよ水量が多くて下れないから此處で水の少し減るまで待ち合せる。早速ザイルを枝から枝へ渡して濡れた物を干す。天幕の横では紫色の焚火の煙が元氣よく立ち登る。無人島に流れ着いた漂流民の樣だ。やがて青空が大きくなつてなつかしい陽の光がかつと谷間を

照す。ひぐらしがかまびすしい程に鳴き出し、雨の間木の葉や草の葉の裏に隠れて居た色んな虫が威勢よく飛び廻る。谷間を擧げて日の光りを祝つて居る様だ。水量の增へるのも速いが晴れると減るのも早い。朝のうち水の沫を食つて居た石が十時頃には早乾いてしまつて居る。その上にねそべつて熱い日光を避ける。何んとも云へぬ心地だ。今日はかたいめしを食う。

水量も大分減り、天幕や他の濡れた物もすつかり乾いてしまつたので晝からせめて岩魚か山魚の居る邊まで川を下る事にする。一時半この三日も停滯したすかんぼの生へた露營地を後にする。三四十分も下りるともう岩魚が悠々と泳いで居る。停滯の時、魚でも釣れゝば幾分あじき無さもなぐさめられたらうに。二時十分三番瀧に着く。四時に、去年Mが仲間と二人で岩魚釣りに登つて來て小屋を葺いたと云ふ所に着いた。彼等の仲間ではMは一番上まで登つたのだが此處から上へは登らなかつたと云ふ。立派な小屋がけの跡がある。こゝへ天幕を張る。KもNもMも皆釣り出す一時間も立たぬ間にたちまち大小見事な岩魚が白い腹を見せて幾十匹も釣り上げられる。夕食は素晴らしい御馳走だ岩魚の出來得る限りの料理がなされる。雨にとぢ込められた時とは又著しい變り方だ。皆めしはあまり食はずに魚ばかりを食つて居る。濁りに染ぬこの魚は久し振りに、鈍り切つた私達の味覺に滿足を與へてくれた。今日はアイヌは焚火の傍で寢る。私達は樂々と延びて寢られる。雨の時と比べてどれもこれもが極樂だ。夜の空にはしばらくの間私達を見捨てゝ居た星が美しく輝いて居る。

廿一日　晴天

又いゝ天氣が續くらしい。嶺の雲もちぎれちぎれに飛んで居る。今朝も魚の馳走に腹をふくらし、七時半歩るき出す。昨日から比べると水量も隨分引いて居る。徒渉は大分浸からさせられる。エサオマントツタベツ川ミトツタベツ川ミの合流點には九時五十分、二ノ瀧へ着いたのは十一時廿分だつた。晝食にも魚の馳走だ。人間と云ふものは贅澤なものでもう魚が鼻について來る。

先頭のMが人が居るぞと云ふ。皆一樣に眺めると私達と丁度反對の岸に流れをへだてて年取つたアイヌの男女が二人岩魚を釣つて居る。芽室を出て以來、途中熊にこそ會つたが人に會つたのは九日目だ。懷しさがいつぱいでオーイとこちらから手を揚げる。流れの音で聲は聞えないが溫厚

そうな顔がこつちを向いて莞爾り挨拶をする。黒い毛の艶々と垂れた實にやさしさうな端然とした顔をして居る。この上流の谷間に靜かに激流に竿さして岩魚を釣る彼等の姿は雄大な背景とこの上もなく美しく調和して居る。北海道の持つ美しいものゝ一つを見たのだ。私達はしばらく見とれて居た。やがて名殘りおしく彼等を後にする。途中幾度も隨分深く浸つて徒渉する。その度に寫眞のフイルムの事が氣にかゝる。水が出て居るので徒渉が常よりつらいとMが云ふ。一番瀧には三時廿分に着いた。四時廿分ピリカペタン川合流點に出る。大分川幅が廣くなつて來る。オピリヌプ川合流點に出たのは丁度五時だつた。此處からは岩魚釣りの通る細い路らしいものがついて居る。この路を一時間ばかり歩いて六時に河原に天幕を張る。今日は隨分頑張つてよく歩るいた。Mの達者なのにはあきれる。上帶廣まで後三里もない。今日が長い行程の最後の天幕だ。何んだか名殘りおしい氣がする。一同今日の疲れにぐつすり眠る

廿二日　晴天

朝五時めしが炊けたとアイヌのNが起す。上帶廣から帶廣への輕便鐵道は朝の九時頃と夕方の四時頃だとMが云ふのでどうせ九時に行き着く氣はしないしゆつくり出掛る事にしてしまふ。六時に朝食をとる。すつかり仕度をして出掛けたのは七時だつた。ゆつくり歩いても、早く歩いてもどつちみち熱いのでMはどしどし速く歩るく。アイヌのNは今日は又馬鹿に元氣がよくMに遲れずに着いて行く。九時前頃犬の吠る聲が聞へる。里に出たのだ。熱い日光に照りつけられながら馬が開墾地を耕して居る。ドンドン平地を歩くと足の裏がたまらなく痛い。太陽の直射は刺す樣に激しい。十時十五分に上帶廣に着いた。とりあへず驛へ行くと午前の汽車は十時十五分發車だ。やつと五分の所で間に合つた。夕方の汽車でなきや乘れないと思つて居たのにたゞ何と云ふ事なしに頑張つて熱い道をドンドン歩るいたのが役に立つてしまつた。

遠く夢の樣に幾重にも重つた山々の後に一際高く、薄青く連る日高の山脈はまざまざと私達を見送つて居る。ガタガタと汽車は大きな音を立てながら六人の山歸へりの男を運んで行く。

（終）

【後記】

始め僕等の計畫では、美成川を遡り、陸地測量部五万分一の地形圖の戸蔦別岳に登り、日高幌尻まで尾根を縱走し

て、二岐澤から千呂露川を下り、右左府から金山へ出る豫定であつた。地圖に依ると此の間の尾根は千八百から二千米突までを往來してゐて、餘り激しい高低が無い樣であつたから、全く未知ではあつたけれども、多分行けるだらうと考へてゐた。事實は豫想以上に都合よくて、ハヒ松にも惱まされなかつた。しかし千七百米突以下になると猛烈なブッシュやハヒ松に妨害されて、尾根の縱走は困難になる。又アイヌの稱んでゐる山の名と、測量部の地圖のそれとは大變異つてゐる。アイヌの呼んでゐる方の名稱の名がはるかにいゝ樣である。何故ならば、彼等はある川の源がそこに發してゐる山嶺にその川と同じ名稱を附してゐるからである。だから例へば、地圖の戸蔦別岳は美成岳（ピパイロ）であり、戸蔦別川の水上に聳えてゐる山が戸蔦別岳である。是は地圖には名稱が附してないが、此の頂から日高幌尻への尾根が西南に走つてゐる。また札内岳とはどれをいふのであるかアイヌにもはつきり解らなかつた。此と札内川の源流にたつ山を呼ぶべきだと思ふ。地圖にある札内岳は、ピリカペタン岳であり、ホロシリ岳から來た尾根が西走して、戸蔦別岳から來る主脈に會する峰がエサオマントッタベツ岳であり、何れもそこに水源を發する戸蔦別川の支流の名をそのまゝとつてゐる。

日高山脈は雄大である。少くとも美成岳まで出なくては此の雄大な全景に接することは出來ない。而し美成岳は僅かに山脈の北端に位する入り易き山の一つに過ぎない。僕等が是の頂に立つた時は、實に申し分のない日本晴であつたが、しかしかの神威岳の如きは遼々模糊として何れとも指示するに苦しんだ。是の山脈の延長實に二十里に及ぶのであるから、また非常に多くのコースも執り得ると思ふ。僕等は途中豫定を變更して戸蔦別川を下つたが、千呂露を下る道程も確に面白いものだと思はれる。しかしアイヌの話では、二岐より上流はかなりひどいといふことだから、安全を期すならば逆に右左府から入るべきだ。また今度のコースを逆に戸蔦別川を遡るか、或はピリカペタン澤からピリカペタン岳に登り、それから戸蔦別岳の方まで尾根を縱走するのもいゝだらうし、エサオマントッタベツ澤から直接エサオマントッタベツ岳の頂を極めることも出來る。また札内川は戸蔦別川に比較すればずつと樂らしい。僕等の興味は漸次南へと移つてゆく。

三考

君一生

山だスキーだ。スキーだ山だ。

と言つて居る内にもう十月といふ聲を聞くやうになつちやつた。子供の時こそ、一日といふ時間がとても長いものに感ぜられたが、今日此頃ぢや一日が短過ぎる位に思はれてならない。自分達の齢が重つて來たのだらう。

然し山だとか、スキーだとかといふて割合に自然に接して居ると何處となく未だセセコマしい世間の人並とは少し外れて居る様に思ふ。是も人間が環境に支配せらるるお陰であらう。

スキー術も今日此頃ではいろ〳〵の方面に分れつゝある。否もう已に分れて終つた。スキーの過渡期なんていふ言葉も古くなつちやつた。

昨冬は全日本スキー聯盟が出來上つて、この十月中旬に聯盟會議が開かれて、最も合理的に聯盟規定が作成さるる相である。今迄一度スキー術が地方的に夫々別々の發達を遂げて居るから會議もなか〳〵審議せらるゝであらう。地方的に異る發達といふも、要するに雪の質が異るとか、スキーをやる人の範圍が違ふとかと云つた様な爲めにスキー材の種類さへ變られねばならぬ狀態で事物的には大へん異つて居ることは事實だが、然し各地方とも夫々熱心にスキー術とそして之に關聯する問題を研究して來たことは事實だ。つまり熱心家が多いといふことが判る。それだけ實のある審議が遂げられねば嘘だと思ふ。それが利害問題を忘れての最大要件である。そして早く世界的に日本のスキー技を知らしめねばなるまい。それが目下の最大急務である。

くだらぬ功名心や野心にとらはれて居る人々が多過ぎては事々がまとまつて行く筈がない。スキーの會議が纏り兼ねたら眞白い雪の山上にでも立つて、各地の代表委員がくされ切つた室内の空氣を皆な吐出して、大氣の洗禮でも受けてその眞白い雪原の中に於てでもスキーの會議を開くがよい。大項は必ず何とか樂々と纏るに決つて居る。

スキー術の文化がどうなつて行かうと、何時もスキーを穿いて眞白い雪の上に立つた時の氣持に返るがよい。そこにはスキーランナー凡べてに共通に與へらるゝに相違ない尊いものがあるからだその尊い力と云はうか、精神と云はふか賜物と云つて終ふか兎に角に自己の尊い賜物をシャンツエの上に立つランナアも、グレンデエを駈けるランナアも、バードオルトを廻るランナアも、ベルグシュタイグルもスキーを始めて穿いて眞白い雪の上に立つた時の賜物を置き忘れぬやうにしやうてはないか。

何時もシーズンの始まる前に口にさるゝ言葉ではあるが、多事なるスキー界の門途に立つて幸福を祈る。

スキー競技種目に就て

岡村源太郎

スキー競技會の際に採用せらるゝ競技種目は、競技出場者の練習に對する指針を定むるに重要なものであつて、競技種目の選擇は決して疎略に爲る事は出來ない。競技種目の合理的なるか否かに依つてその地方或は全國のスキー競技界の發展の上に、少からざる影響を與ふるものである。例へば或るスキー競技會に於て、その競技種目が全てディスタンスレース或はスラロームレースのみで、ジヤムピングが種目に入れられてなかつたとしたならば、その地方のスキー競技會としては、スキージヤムピングの發達は極めて遲々たる事を免れない。或は之に反し盛大なジヤムプ大會が開催せらるゝにも拘らず、競走が殆ど從屬的餘興的に行はれて居るやうな地方では、同樣に優秀なディスタンスレーサーの輩出を見る事は出來ない。

即ち競技種目は如何なる種類の競技大會に於ても、充分に考慮して選擇すべきで、合理的なよくそれ〴〵の競技會の本質に適つた種目に從つて競技せしめ、スキー競技の健全なる發達を期すべく力めなければならない。此處に私は可成規模の大なるスキー競技會に就いて、概略的に競技種目の問題を考へて見たい。

先進國の狀態

先進國主として歐洲に於て最も廣く採用せられて居る種目は四つである。即ち復合競技（ジヤムプ及びディスタンスレースのコムビネーション）ジヤムピングのみ、短距離

及び長距離のディスタンスレースがそれであつて、之は又國際競技規定に於ても同樣に次の四つが國際的競技として認定せられるものと記してある。

（山とスキー第三年三十六號參照）

1. Kombiniertes Rennen: Sprung und Langlauf umfassend
2. Langlauf allein
3. Sprunglauf allein
4. Dauerlauf

第一の Kombiniertes Rennen 復合競技は、ジャムプ及び短距離競走とを抱合するもので、同一の競技者がジャムプ及び競走を行ひ、その各々の競技の成績の和を以てその競技者の復合競技としての成績を決するものである。從つて之にはジャンプ並びに競技に優れた、眞にスキー競技に堪能なるスキー家にしてよく好成績を擧げる事が出來るのである。第二及び第三は共に競走のみであるが、Langlauf は短距離で Dauerlauf は長距離と考へるがよい。そして短距離は十粁乃至二十五粁の競走で、長距離は三十粁乃至六十粁の距離を滑走競走せしめて居る。之等のジャムプ或は競走の競技には、勿論唯一つの種目に得意なスキー家でも容易に參加の資格が得られる。

之は概括的に見た所及び國際規定による所であるが、猶、國により時によつては、多少の相異或は餘分の競技が加へられて居る。即ち獨逸では以上の他に障害物競走、リレーレース等が行はれて居る所がある。又瑞西では軍事競走が盛んであつて、之は四人の斥候隊に相當する銃を負ふた兵士が、團體を爲して競走するのである。Militär-Ski-Patrouillenlauf と稱せられ、瑞西のスキー選手權大會には必ず附き物で、又昨年のシャモニーの冬季オリムピックにも採用せられた種目である。

スラロームレースは英國が近年重要視して行ふやうになつた。然し之は殆ど英國のみに限り、他の國では瑞西あたりで稀に行はれるに過ぎない。從つて英國以外のスキー界では、リレーレースと同樣にスラロームに對する選手權なるものは全く無い。

スキーの王國諸威では、毎年有名なホルメンコーレンデーが開かれるが、之には國際ルールに示された競技種目と殆ど同一のものが選ばれて居る。

廣義の Langlauf 即ちディタスンスレースは、長距離短

距離の漠然たる距離の區別は與へられて居るが、各國その精細な點に至つては全て相異つて居り又時によつて變化する。即ち短距離には十キロ、十二キロレースより十七、十八、二十キロレース等がある。此處に注意すべきは此の短距離に屬すべき競走には、殆ど二種目以上が一例へば十キロと十七キロレースと云ふ如く一採用せらるゝ事の無い事である。長距離は三十、三十五、四十、五十、六十キロ等が選ばれ、殊に三十キロ及び五十キロが多い。又此の長距離の場合でも同一競技會で二種以上の距離が三十キロと六十キロと云ふ如くに採用せらるゝ事は甚だ稀である。

有名なホルメンコーレンや昨年のシャモニーでは、短距離には十七又は十八キロ、長距離には五十キロが選ばれて居た。猶軍事競走では三十キロを走るが通例で、リレーレースは三十乃至四十キロを數人に分擔滑走せしめて居る。

以上述べた所に依れば、國際ルールを始めとし各國のスキー競技會に於てはジャムブよりは競走の種目が僅かに多くなつて居る傾向がある。然しながら此の兩者の種目數の相異は極く輕度のものであつて、ジャムブと競走には殆ど同樣の重要さを與へて居ると見るが至當である。恰も陸上競技に於けるトラックとフィールドの種目數の相接近して居ると同樣である。殊に五十キロレース等の長距離競走は或國では少しく特殊の種目と爲し、選手權大會には採用しない所も少くなく、從てジャムブと競走のみ及び復合競技の三つだけに選手權を與へて居る所もある。

階級別の制度

前述の如くスキー競技種目は、その數に於て數種を擧げるに過ぎない。從つて冬季間に於ける最も一般的なる競技として數多のスキー競技者に對しては、稍種目が少な過ぎるの感があるのであるが、之に對し歐米スキー界に於ては何れの國でも階級別の制度を取つて居る。即ちジャムブならジャムブ、或はラングラウフだけに就いて、同一の競技をクラスに分けて競技せしめて居る。他の制度は極く地方的に行はれて居る競技會でも又は一縣を統括する選手權大會にも同樣に用ひられて居り、唯出場者の比較的少い所の軍事競走や五十キロ競走の如き稍特殊的色彩を帶ぶる競技に於てのみ、クラス別制度の設けが無いのみである。然し又スウエーデンの如く、六十粁競走にも第一第二のクラスを分けて居る國もある。

クラスの分け方は概して年齢及び競技者の年功の如きも

のに依つて居る。老年、年長、少年組の三組に分けたり、或はA、B、C又はファートス、セカンド、サードクラスの三つに分けて居る。又別に婦人組 Damenlauf の存する事は勿論である。猶、婦人或は少年組では當然距離競走は特別に十キロ以内の短距離を走らせて居る。之等の枝葉に亘る詳細な點に至つては各國、各地によつて可成り異つて居る。（山ミスキー第二年一六六頁同第四年四四二頁「四九號」に詳例あり）

スキー競技發達との關係

歐洲に於ては前述の如く主としてジャムプ及び競走が種目に算入せられ、且つそれ〴〵がクラス別によつて競技を區分してある事、或はその地方によりリレーレース、軍事競技、スラロームレース其他の競技が從屬的に附加せられてある所の存する事は、皆その地方のスキー競技界の發達の狀況に從つた結果が現はれたものと考へられる。その細い要素としては、地形、氣候、住民のスキー運動に對する熱心さ大きく考へればその國民性等が擧げられ、その地方に適當した競技種目が選ばれて居る筈であるが、更に之を反對に考へて、競技種目がその地方のスキー競技界を支配する事も少くない事を知る事が出來る。スキーの源泉地たる北歐に於ける著名な大會の刺戟が、種目の上にも少からざる影響を全歐にまで及ぼして、大體現在の如き主力をジャムプ及び競走に致すやうなスキー競技界を見るに至つたのである。

そして歐洲スキー界はジャムプと競走に於ては殆ど同一の步調を以て、諸威をリーダーとして年々進步の實績を擧げて居る。之が又昨年始めて行はれたシャモニーの大會や其他著名スキー競技會に、各般の影響を與へ或はその證明を得て居る。之に就いて興味ある點は、歐洲スキー界より隔つた米國に於ては、國內の競技會は主力をジャムプに致し驚くべきレコードを示しつゝあるにも拘はらず、競走に對してはジャムプ程の熱烈さは無い爲に、あのスポーツ全盛の米國ですらスキー競技選手としてはジャムプ以外には優秀な選手をシャモニーに送る事が出來なかつた事である又國內競技會に軍事競走の種目を有し居らぬ諸威は、ラングラウフ及び飛躍に絕對的勝利を占めて居たけれども、軍事競走では瑞西チームに優勝の榮を與へなければならなかつた。

我國の狀態

我國のスキー競技界は、前述の歐洲の狀態に比しては、全く異つた種目制を取つて來た。少くとも最近三ケ年の大日本體育協會によつて全日本スキー選手權大會の主催せらるに至つてよりといふものも、可成歐洲とは相異つた趣意の下に支配せられて居た。即ち選手權大會開催前の一九二二年（所謂スキー界第十シーズン）以前に於ては、スキー競技種目には殆ど全てディスタンスレースのみが選ばれ、ジャムプは殆ど行はるゝ事なく僅かに二指を屈し得る位のものであつた。地方的に行つた競技會や、全國の名を冠して行つた稍規模の大なるものに於ても、又は札樽地方で行はれた競走のリレーレースに於て然うであつた。

次に全日本スキー選手權大會の開かるゝに至つてよりも本大會及びその豫選大會はディスタンスレース及びスラロームレースを甚だ重要視した形となつて居る。

第一回　（一九二三年）

一、一粁競走
二、四粁競走
三、十粁競走
四、八粁リレー競走
五、ジャムプ
六、クリスチアニアスラローム
七、テレマークスラローム

第二回　（一九二四年前年に同じ）

第三回　（一九二五年）

一、四粁競走
二、十粁競走
三、十六粁競走
四、十六粁リレー競走
五、ジャムプ

一目して先に述べた國際競技種目其の他とは、大いなる相異の存する事が知られるであらう。そして競技種目選擇の趣意には歐洲競技界に於けるものとの間に可成の懸隔があつて、素人考へを以てしても第一、第二の競走や第四のリレーレースに如何に立派な成績を示した人も、外國のスキー大會には出場し得る資格が無いやうに思はれる。猶距離競走は短距離、中距離及び長距離として四、十、乃至十六粁が選ばれて居るのであるが、外國の例に當てれば何れも皆短距離の部類に入るべきで、殊に十粁以下の短中距離

競走やリレーレースは少年或は婦人競技に適當して居るのである。

かゝる相違が彼我のスキー競技界の種目のみにも存し居る事は、我國スキー界の從來の幼稚さを物語るものに外ならない。數年前はスラローム（換言すれば實用化せるスウイングの完成）さへも自由に行ひ得る人は我國には指を屈するのみなりし事、ジャムプ技術の極めて困難にして之を爲し得る人の少く且つ一般化せざりし事、或はディスタンスレースに對する智識及び技術の不足等に依るのである。從つて此のスキー界の狀勢に適する如き競技種目が、前述の如く配列せられてあると認められる。即ち彼我のスキー界の進步發達の大なる相違が、かゝるスキー競技種目の上にまで影響を及ぼしたのである。

將來に對する希望

然しながら元來、スキー競技の本質或は歐洲の狀態を顧みれば、競技種目は第三回選手權大會の際のものを以てしても決して合理的なものとは云へない。十キロと云ひ十六キロレースと云ひ皆短距離レースで、リレーレースは何處の國に於ても短距離競走の連續である。之等を四種目にも分けてジャムプ競技と共に設け置く事は、ディスタンスレースを甚だしく重要視する事となり、惡く考へれば短距離レースをくだ〳〵しく並べ立てるに過ぎない。丁度米國のスキー競技界とは正反對である。

そして此の選手權大會の競技種目は、既に我國スキー競技界を競走の方に傾けしめんとして居るやうに思はれる。ジャムプ技術の完成には多大の困難を嘗めねばならぬもので、各般の極めて敏活なるべき正しい動作の習得には長年月の忍耐を練習者に要求する。從つて斯技の研究はスキー術中最も熱心に行はれねばならぬにも拘はらず、我國スキー競技界の傾向は之と反對に、技術そのものにはジャムプ等に比して甚だ研究の餘地の少いディスタンスレースに對して、多くの優れたるスキー家の手を煩はして居るやうな結果となつて居る。それは我國選手が外國の大シャンツエにて飛躍しよく彼等の如く不倒であり得るスタイルや確實さを有し居るかも危ぶまれて居るにも拘はらず、ディスタンスレースはその技術の體得の容易なるに乘じて、どうにか長距離滑走のランナーも輩出し得るに至り、その技能も歐洲選手に速やかに接近しつゝある事により、容易に察知せられる。或はディスタンスレースに於て他に優れんとす

るには、反つてジャムピングに於けるよりは甚だ周到なる準備と、より長き練習經驗を得なければならぬ氣味の存するのが、現在の我國スキー競技界の狀態である事がその證據である。即ちジャムピングを幾分等閑に附した傾向が表はれんとするに至つた事は、此の偏停せる競技種目の然らしむる所が少くない。此事實は廣く地方的小團體の小競技會の種目にまで影響を及ぼして居る事は勿論である。

（山とスキー五十號參照）

それで私は、今後の我國スキー競技界としては

一、スキー競技の本質としてジャムプ及び競走は、その研究の上には輕重を附すべからず、寧ろ我國の如き地形、氣候の所にあつてはジャムプに力を致すべきものと考へる。

二、國際的舞臺に我國スキー競技界が加はるべき準備として

三、スキー競技のより一般化を計らんが爲に

競技種目は國際規定に準ずべき事を望んで止まない。即ちジャムプ及び短距離競走のみの競技と復合競技とを競技種目として選定し、之等の各々にクラス別制度を建て、猶特別に長距離競走として三十粁以上の競走を少くとも一回は國内に於て行はるゝやうにするのである。之によつて前述の目的は充分に達し得られ、何時なりとも世界の舞臺へ、未熟なら未熟なりに選手を送る事が出來る。又我國に於て發展の天地の極めて有望なるジャムピングが甚だ盛んとなり、且クラス別の制度の競技會は、老年者、婦人、少年の競技を大いに振興する所以となる。

此の意味に於て小樽スキー競技會等は種目の改善に對しては稍先鞭を附けたものと云ふべきである。

ジャムプ　A　中學生組
　　B　小學生組
競　走　A　實業團九粁レース
　　B　實業團リレーレース
　　C　中學生リレーレース
　　D　小學生リレーレース

唯競走にはリレーレースのみを採用する傾向あるのは面白くない。リレーレースでは、一人擔當區域を十粁以上とする事は殆ど不可能であり、從つて長距離に對する練習の機會を比較的少からしむるものである事を注意しなければならない。從つて之は復合競技等の行はるゝに至つて、現在の如き重要さは自ら消滅すべき運命に在る。無論リレーと長距離を重ねて行ふとすれば、ジャムプは種目の一小部分を占むるに過ぎなくなる。

猶北海道選手權大會及び北大スキー部大會に於ては、ジャムプ

ABクラスを分つて競技せしめ、好結果を得て居る。（方法に就いては猶改善の余地あるも）

猶かく國際的に競技種目を少くする事は、天候に極めて影響を受け易いスキー競技を行ふに就いて、競技委員としても極めて便益多く、參加者は一つ或は二つの僅かの種目に全力を致す事が出來る。又之は競走の距離が長くなるにつれて、必然的然うあるべきものである。從つて十粁以下の短距離競走或はその連續なるリレーレース等は當然廢すべき運命に在る。之に反して復合競技等が盛んになるならば、如何にスキー競技者として申分なき人を多く輩出せしむるかわからない。又地方的にも團的體にもジャムプに競走に共に優秀な結果を齎す事になる。

最後に私は軍事競走が我國軍隊の間に盛んに行はれん事を望む者である。武裝せる軍人の團體競走であるから、興味も多く又實益も少くあるまい、師團或は聯隊等の對抗が行はれるやうになつたら、現在のリレーレースに代る最も好い競技種目の一つであつて、猶選手權大會の種目に入れる事も軍隊競技として何等差支へない筈である。當事者の充分なる研究を煩はしたい。

我國のスキー界は將來は競技の上に於ても、充分世界的に成り得るものと信じて、之が國際的發達に入るに就いて忽せに爲し得ざる競技種目の一端に關して、以上簡單に愚見を述べた次第である。

（一九二五・八・二）

H. U. S. V. 新著圖書

Alpine Jounal Nr 230.
Das Wunder des Schneeschuhs. von Arnold Fank. u. Hannes Schneider.
Der Winter. Heft 13.

寄贈圖書

ベテスツリアン　七十八號　神戸徒歩會
「山」第一年第一號　甲斐山岳會

りしりしのぶ

館脇操

一つの世界に入つたら、それが一つの世界であることを、何より先に知らなければならない。一つの世界は全體の世界でなく、たゞその一小部分に過ぎない。

私はこんな平凡なことに筆をおこして、先づ自分の心に小さな安定を與へ、六年の間旅にものした自分と言ふ愚かな者のメモを、ボツ〳〵とみんなの前に出したいと思ふ。

歌らしきもの、詩らしきもの、これに小品らしきものが私の秩序ない頭をあらはす樣に、秩序なく出鱈目にならぶであらふ。

夕張への心。

山。
それは驚異であり
それは嚴肅である。
山。
それは死の表徴であり
それは生の聖劇である。
山。
それは涙であり
それは緊張である。

二月のある日、琴似のシルヴアースロープで、並河教授や後藤さん達と直滑降を享樂しての歸途、夕張の大きな姿はどんなに私の心をさらへたらう。

× × ×

おゝ、忘れ兼ねた山の味。
無細工だが
爭はれぬ自然の大きさが
そのまゝにあらはれ出た山の姿よ。
大地のなつかしみに
すべてを抱擁したい慕はしさが
体中に一杯になる。
男の感激だ。

人間そのまゝの感受性だ。

荒廃した山脊にメアカンフスマ群れ咲く雌阿寒の一峯に立つて、極光色の午後の陽を帶びた中央高地を右から左へと追ふ時、夕張の山容はどんなに私の眼にうつつたらう。

× × ×

山への愛は人類永遠の愛である。
山への憧憬は人類久遠の憧憬である。
人間は、たゞへ文化を謳歌するとも、なほどこかになつかしい香を帶びた野性をひそませてゐる。その野性は自己が自己に立つた時、むつくりと頭をあげる。

× × ×

山にてうたへる。

星の世の美しき夢
描きつゝ
天幕に入り毛布かむれり。

太陽と大地の幸を
なつかしみ
お花畑の朝霧をゆく。

× × ×

支勿の月夜。
美しく悲しきものは月明に
湖と山との無言の抱擁。

人はいつも同心圓を描いて、ひろがつてゆく。中心は固定されてゐて、たゞ圓が大きくなるか小さくなるかなのだ、そしてそれが時たま靜止するほかは、いつも旋回的にめぐつてゐる。

× × ×

北樺ワイミ川。

キヌヤナギの葉の裏の銀の光さへ旅の心をそゝるのに、長くひゞきわたるトナカイの角の鈴。
舟はギリヤークのカヌー。
岸に憩ふツングスの顏。
これ一つとして詩でないものがあらうか。
旅そのものは一つの詩だ。更に詩の中に詩を見出す美しさ。
詩は光だ。ものいへず自然に順禮してゆくのは、その光の幸だ。
自然に育まれたものが、その自然に生くる時、寂しいながら光は清さを增してゆく。
放浪。
そのものに、いつも自分を見出してゐる私が、どう言ふ心で今トナカイと放浪のギリヤークをみてゐるか。うそもほんとうも知らないで、唯放浪に。
人そのものゝ表現に、狂しい空虛がまろびつゝも、なほ、原始の歡喜がうかぶ。

月夜の逍遙は
魂の放浪であり
また
死の舞樂である。

（原生林の夜）

スキーの思出（三）

— 瑞西、サント、モーリッツへの話 —

大野精七

瑞西はオーバ、エンガヂン、サント、モーリッツの冬を見たいとは、自分が年來の希望で忘るゝ事が出來ないのであつた。有名なる活動フィルム「スキーの驚異」の製作地と云ふ爲めばかりで無く、ウインタースポルトの地として世界的に有名な所を見てみたかつたからである。

自分がフライブルグ（大正十二年九月）を去る時、同好の友木下良順君と此の冬をサント、モーリッツで落ち合ふ可く約束した。獨逸を去り巴里に至り十一月中頃から英國に渡つた。冬のロンドンは名物の霧で殊の外不愉快である木下君との交通によりて二十四、五日頃サント、モーリッツ、ホテル、アルバナに投宿する事とした。

十二月十五日ロンドンを去り順路白耳義のブルッセル、アントワープ等を見物して、二十日巴里に着いた。巴里の同ホテルにはスキー先輩たる河本禎助君が居らるゝが、同君は毒瓦斯研究の爲め氣管を害し、病後靜養の爲め伯林からわざ〳〵來られたのでスキー行などとは思ひもよらざる事である。此のクリスマスを花の都を捨てゝスキーに出かけようと云ふ變り者は一人も居らぬ。自分は木下君との約束通り二十四日午後八時單身ブダ、ペスト行きの汽車に乘つて巴里を去つた。翌朝午前五時頃瑞西國境バーゼル着、約一時間停車稅關吏の檢査あり、列車は其の儘として運轉士や車掌が瑞西人と交代され、六時頃出發九時頃チューリヒ着、間も無くサン、モーリッツ方面行きに乘り換ふ。先年夏期の旅行と異なり只今は全く雪の瑞西である。

汽車は幾つかの湖畔を走つて谷間を進んで行く。瑞西の景色は一般に北海道に似て居る。正午近くクールに到着、ステーション食堂にて晝食す。〇時半頃發、登山電車に乘る。雪の箱根山を電車で登る氣持がする。午後三時半頃サント、モーリツツ着、巴里から此處まで約十九時間かゝつたわけである。

停車場にホテル、アルバナの客引きが居る。日本人が一人居ると云ふ事を聞いて喜こんで行つて見ると木下君では無い。外出中ではあるが伊原氏（伊太利、ミラノ日本綿花會社々員）と云ふ事がわかつた。兎に角同胞の居るには意を強うしたが、ホテルは滿員で部屋が無いと云ふ。サン、モーリツツは今（クリスマス）が書き入れ時である。素人屋へ泊る事をすゝむる者があつたが、自分は部屋があくまで風呂場（日本なら行燈部屋）に寢る事となつた。風呂は自由にこれるが外を眺め得る窓の無いには頗る閉口した。此れも經驗の一つとあきらめざるを得なかつた。

サント、モーリツツは國の東南に當れるグラウブンデン州にあつて、景勝なるオーバ、エンガヂンの中で最も高い村（一八五三米高）である。人口約六千人、サン、モーリツツ湖（海拔一七七一米）の北岸にあるイン河は谷間を流れてカンフエルゼー、サンモーリツツゼー等の湖水を連ねて居る。前面（南方）湖水を隔てゝ左よりピツツ、ムラグル（三一三三米）ピツツ、ラングアルド（三二六八米）ピツツ、ロサツチ（二九九五）ピツツ、スルレイ（三一八七米）等、氷河を有する高山が連なつて居る。村の後方（北）にはアルブギヨツプ（二一八三米）アルブ、ノア（二二一九米）ピツツ、ネール（三〇六〇米）ピツツ、ユリール（三三八五米）等が連立して其の雄大を示して居る。

當地はウインター、スポート殊にスキー、スケートの好適地であつて、パレス、ホテル、グランドホテル、クルム、ホテル等の一流處は各々ベツト四百を有し、ホテル專用のスケート、リンクを持つて居る。尙ほ大小の完備せるホテルは三十軒位ある。尙ほ多數の公設リンクやボツブスレーが數ケ所に出來て居る。以て各國の金持連を吸收して居るのである。

やがて伊原君がスキーから歸つて來られた。同君は四日前から此處に居る。逗留しつゝある日本人は他に居らぬらしい。一所に貸スキー屋をたづねて見たが何處も皆貸し切れである。オックスと云ふ運動具屋が一番大きい、日本の宮殿下も此處にお出でになられたと云ふて居る。スキー用外

套、ズボン、靴、靴下、手袋、帽子、ゲートル、スキー並にスキー杖、蠟並にバラ（結晶アルコールを燃燒せしめて蠟塗する器）等、スキーに要する一式を買つた買手は澤山つめかけて居る。直ぐにもはいて見たいのだが込み合ふ爲め明朝で無ければスキーに靴を合はせてもらう事も出來ない。

二十六日朝スキーを得、伊原氏と共に村はづれの一八七三米高地に行つて見た。クルムホテルの前を通り、アイスリンクの角を右に曲れば直ぐ其處に達する。緩急の傾斜が幾つもある。初學者の多く集まる所で上手な人は比較的少ない。一時間二フランを出せば胸に徽章をつけたスキーの先生が手を引いて教えてくれる。近所の子供等は男も女も澤山來て滑つたり飛んだりして居る。十二、三の子供連が十四、五米をボン〳〵飛んで居るには驚く。此處にはスキー裝としての型だけ立派な初歩の婦人連も澤山居る。青いジャケツを着た青目玉の少女と、若い青年とのパールは得意になつて滑りまはつて居るので大に注目されつゝある樣であつた。

十二時頃ホテルに歸る。一同はスキー裝のまゝ晝食す。一時半頃再び前高地に行つて見る。午前と大差は無いが雪が踏み堅められカチ〳〵になつて居る處が多い。五時頃スキーをはいたまゝ町の中を滑つてホテルに歸つた。

ホテルの傍にコンヂトライ（喫茶店）がある。クリーム入りチョコレートのおいしい事、生菓子もうまく食はせる我々は夕刻此處を訪問する事とした。滿員の爲め待たさる事が多い。此處は各國人の展覽會宜敷くである。七時夕食開始二百人近くの御客が食堂には入つて來る。夜は皆金ピカの盛裝で出て來る。男子はタキシードを着けて居る者が多い。各地の金持連が金を費ふ可く來て居る有樣だ。英、佛、獨、伊語何れも用ひられる。就中英語が多いらしかつた僕等の向ふのテーブルに佛蘭西語を話す二組の夫婦連れが居る。其の中の一婦人は年の頃三十五歳位、額にまで盛裝させて居る。此の婦人の額は殆ど顏と同じ位廣く且つ長い。其處で約二寸幅のリボンを額から八卷きに後方に結んでオデコを覆ひ、顏型の調和を取つて居るものと推察された。食事がすめば一同休憩室に入る。手紙を書くものピアノをひくもの、トランプを遊ぶ者、雜談するもの樣々である。

チユーリヒ大學の化學者ウインタースタイン博士も令閨令孃と共に此のホテルに居られた。東大の鈴木梅太郎、朝比

奈泰彦兩教授は先生の門下生である。

やがて疲れを休む可く部屋に歸る。風呂場に寢るのだから不愉快であるが致し方が無い。

二、三日の間は例の高地を訪ふたが、此處は人が多くて雪がすぐ踏みかためられてしまう。其の後他によい處を發見した。索繩車（ザイルバーン）でシャンタレラ（二〇〇八米）まで登り、此處からスキーでアルプギヨッブ（二一八三米）アルプ、ノーワ（二二一九米）まで行けば理想的なスロープが多い。此の邊がフイルム「スキーの驚異」の背景となつた所らしい。ベルニナの高峯山脈まで一望に見え、オーバー、エンガヂンの谷を越えてボントレシーナが見ゆる。朝から出かければ充分の時があるが、晝食後出發しても相當に樂しむ事が出來る。歸路は同宿の獨逸人の案內でアルピナを通つて市街に出た。一度アルプギヨッブの雪を知つてからは前の高地に行く氣にはなれぬ。アルプ、ギヨッブ邊には熟達者を喜ばす各種の地型があるのである凡そ三町位あるすばらしい直滑降の急傾斜があつて、二條の直線を畫いて得意がつて居る猛者が居た。自分は殘念乍ら見物役である。

木下君から手紙があり、獨逸國に於ける經濟の劇變により其の當時經濟カタールと云ふ病氣に罹つて來られ無いと云ふ。危い病で無いので安心した。

此のホテルに酒場がある。外の客もは入つて酒、サイダー、コーヒー、菓子などをたべ或は煙草をふかし乍ら駄辯つて居るのであるが、大晦日の夜、我々二人も此の酒場の小テーブルを占めた。老人連が澤山這入つて來て酒をのみ始めた。自分等も今夜は特にワインを注文した。新年を迎えんとして居るのである。やがて除夜の鐘が鳴り渡る。我々も人も立つて互に杯を擧げ、プロジットノエヤールを連呼した。かくして自分は故國を去つて以來第三回目の新年を迎えたのである。

正月二日（大正十三年）今日はジャンプ大會があると云ふので多く觀客は黑塗りの馬橇でチン〳〵〳〵出かけて行く、又馬橇に繩をかけてスキーの儘引かれ行く連中も居る自分等は馬橇の傍をスキーで歩いて行つた。場所は隣村のカンフエルに近きスウレツタハウス、ホテルの前方にありてサンモーリツツから約三十分里程ある。シャンツエは縱林の中で北向きに造られスウレツタ、ハウスとにらみあつて居る。着陸點の三方には大なる棧敷を作つて觀覽せしむる樣になつて居る。自分等はシャンツエの傍まで行つ

てロハで立ち見した。其處に日本人が三人居る。青年松方從兄弟と藤山の三君である。ロンドンからハル〳〵スキーを目的に來たり、既に半ケ月前からボントレジーナに逗留して居ると、自分等は只ジャンプ大會の盛大なる氣分のみを見たのである。此のスウレツタハウス旅館はサーモーリツツ村から三十分もはなれた山中に在る廣壯なるホテルでベット三五〇を有す、日本の山の宿屋と比較せば雲泥の差がある。

三日ボントレジーナに行く、サン、モーリツツから街道を滑り、クレスタ、セレリーナを經て左にサント、ギアンの古寺を眺めつゝ、ミユラーグル、バーンの基點をよぎりフラツツ河に沿ふて行けばボントレジーナに達す。此處からピツツ、ラングアルド（三二六八米）に登れば其の周圍の眺望殊に雄絶なるものありと。ボントレジーナの村はづれに達すれば兩松方並に藤山の三君が居られた。同君等のホテルに案内されて茶の饗應を受く。松方（小）藤山の兩君はロンドン大學に勉學中の人で、松方（大）君はスキーの名手で瑞西に於ても嶄然として頭角を表はして居り、日本人の爲め大に氣をはいてくれた。日本から歐洲のスキー界を見に來て居らるゝらしく、尙ほ一ケ月此の地に滯在するさ云ふて居られた。夕刻寒さに震へ乍ら電車を待ちやがて車中の人となつてホテルに歸つた。

四日朝は湖畔を散步して見た。午前十一時、松方（大）藤山の兩君來たる。松方（小）君は不參。グイルバーン（索繩車）にてシャンタレラに登り、此處のクールハウスで晝食を共にし、アルプ、ギヨツプに登る。歸路松方君の先導で可なりの絶壁を降る。

何時までも滯在したいのであるが、歐羅巴を後に解纜の日（十六日）がせまつて居る。五日はアルピナの雪と最後の別れを告げねばならぬ。其の夜は出發の仕度をした。スキーと杖とはホテルの令息を介してサンモーリツツ小學校生徒で貧困で然も學問の優秀なる者に進呈する事とした。

六日（日曜）朝七時頃巴里への歸途につく、ベルンに途中下車し運動具家ビエルンスタツトをたづね、河本君よりの依賴により細川侯爵へのスキー並にB.B.ビンドウングに就いて問ひ合せた。翌七日ノエシヤテル、ポンタリールを經て巴里に歸る。同車中令息令孃（共に十五六歳）づれの英國婦人あり此のクリスマスを瑞西ウエンゲンのスキーで暮らし只今巴里を經てロンドンへ歸る處なりと、それは恰も隣村へ遊びに行つて歸る調子だつた。（終り）

◆山とスキーの會は北海道帝國大學文武會スキー部の有志が、此の雜誌を發行する爲に作つてゐる會です。

◆スキーを研究せられる人、登山に趣味を持たれる方が一人でも多くお讀み下さることをお願ひいたします。

◆山岳及びスキーに關して何なりとも御寄稿下されんことをお願します又印畫の御惠送を切望致します。原稿紙は御申越次第お送り致します。

◆原稿は、。を一字とし、行を更めるときは一字下げること。

◆記事中の數量は全て、C. G. S. 系によられん事を望みます。

◆雜誌代金に就て一應下記の諸項を御承知下さい。

定價　金參拾錢

＊前金御申込か、現金でなければお渡しいたしません。

＊御送金はなるべく振替にてお願致します。

＊六冊分前金拂込の方には送料を頂きません

＊前金の切れた時には最後の分の包裝にその旨記します。次の御送金あるまで配本を見合せます。

＊本誌は營利的の刊行物ではありません。紹介、緣故の有無にかゝはらず雜誌の代價は頂きます。

大正十四年九月三十日　印刷
大正十四年十月　一日　發行
（毎月一回一日發行）

編輯者　相川正義
印刷兼發行者　廣田戸七郎
印刷所　札幌印刷株式會社
札幌市北一條西二丁目
發行所　山とスキーの會
札幌市北六條西六丁目
振替口座小樽八四九五番

第二回畜産工藝博覽會ニ於テ

一等賞金牌受領

登山靴とスキー靴

東京市本郷區四丁目角

太田屋靴店

電話小石川四七一二番

振替東京六一二七番

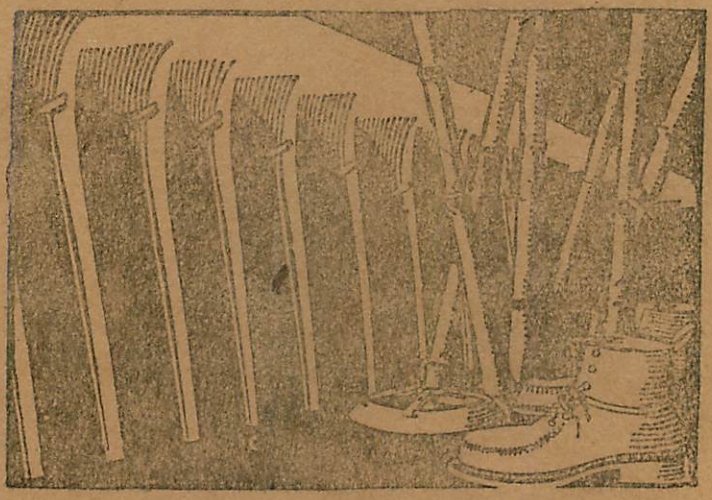
La Gazeto
de la
Monta kaj Skia Klubo
No 58. Oktobro 1925. Sapporo. Japanujo.

大正十三年七月二七日第三種郵便物認可
大正十四年九月三十日印刷納本
大正十四年十月一日發行

山とスキー 第五十三號

定價參拾錢

MIMATSU
SKIING, MOUTAINEERING
A N D
GAMPING OUTFIT



美滿津特製
スキー・山ノ道具・及ビ
キヤンピング・アウトフキツト

合名會社
美滿津商店
東京・本郷・赤門前